



北倉150 花氈 第1号 部分



北倉150 花氈 第6号 部分

北倉一五〇 花氈 第一号

宝庫花氈中、「花氈 第一号」は最も華麗である。紺地多彩の複合大宝相華文様で、特に大小交互の側面花形を八繋ぎとした、旺盛な大円形に魅了される。複数がつれるようにめぐる茎は、その一茎つつの先端に大小花蕾を生じ、花と茎のつながりを納得させ、意匠にも唐代の写生尊重をうかがわせる。

(切畑 健)

北倉一五〇 花氈 第六号

小刻みの花葉で構成した、きわめて明快な意匠の「花氈 第六号」は、まさしく西域の陶板意匠を想起させる。しかし、両長側中央の形象に注目しなければならない。これは三山の寄り添う形で、花氈のみならず宝物の意匠にしばしば見出せる。その源は昇仙不死を得る崑崙山の三角・三峯であり、あるいは東海中の蓬萊、方丈、瀛州の三神山で、あらわして吉祥を祈念する意匠とされたのである。

(切畑 健)



北倉150 花氈 第21号

北倉一五〇 花氈 第二十一号

宝庫北倉に三十一枚が伝えられている花氈類については、材質の特色からその産地の推定が問題となる。一方、意匠の側からも同様の結論がそれと重なる筈である。いま三例の意匠をうかがおう。「花氈 第二十一号」は、その躍動する花の壮大な構図で見る者を圧倒するが、それはそえられた葉とともに、全花形の蓮華唐草と考えてよい。仏教東漸は多様な蓮華意匠をともなったが、根づいた中国では特に唐代の熱狂的な牡丹愛好が知られる。この蓮唐草にも見落としてはならないが、牡丹葉がそえられている。葉は向い合って立ちのぼる茎の元の部分と他の数カ所で、あくまでも牡丹を意識からはずすことのできない、中国人ならではの造形が看とれるのではないだろうか。

(切畑 健)